

Active Learning Report

2019 年度

アクティブ・ラーニング 実施報告書

茨城キリスト教大学文学部
文化交流学科

***オンライン用に画像や記事を抜粋したものです。実際の印刷物をご希望の方は、文化交流学科までお問合せください。**

巻頭の辞

文化交流学科では、「アジア・欧米など諸地域の歴史や文化に関する知識を身につけ、それらの地域と日本との異文化間交流の経験を積み、その学習成果を国際共生・観光・地域貢献・日本語教育などの場で発揮する能力を備えた者の育成（ディプロマ・ポリシー）」を理念に掲げ、アクティブ・ラーニング形式の学びを重視した多様な教育活動・地域貢献活動を進めています。文化交流学科アクティブ・ラーニング実施報告書は、本学科が実施したアクティブ・ラーニング形式の授業や活動の記録・報告冊子です。今回は、2019年度に実施した活動のなかから、下記の4事業を報告します。

「日立風流物後継者育成事業」

日立風流物とは、日立市宮田地区で300年以上続く、山・鉾・屋台行事です。日立風流物は山・鉾・屋台行事としては全国で初めて1959年に「国の重要有形民俗資料〔重要文化財〕」に指定され（京都の祇園祭は翌年指定）、また2009年には祇園祭とともにユネスコ無形文化遺産に指定されました。世界的に高く評されている日立風流物ですが、現在は深刻な後継者不足の中で存続の危機にあります。こうしたなか文化交流学科では、本学学生たちを日立風流物の担い手として育成すべく、2017年より「日立風流物後継者育成事業」を進めています。

「日本語教育実習」

日本語教育を専攻する学生たちが、国内の日本語学校や日本語ボランティアサークルで実施する、実習科目です。インドネシアやカンボジアにある協定校で、現地の学生たちを対象に日本語教師の実習を行うことも可能です。授業発足当初は学科教員が引率しました。しかし現在では協定校の受け入れ態勢が整ったため、教員は同行せず、学生たちが独力で現地へ赴き、実習を行っています。

「ひたちサンドアートフェスティバル」

ひたちサンドアートフェスティバルは、河原子海岸の活性化と街の新しいイベントづくりを目指して2008年に始まった、夏の海の祭りです。かつては海水浴客で大いに賑わっていた河原子海岸も、今では年々観光客が減少しています。こうしたなか、日立青年会議所を中心に住民たちが立ち上がり、このイベントが始まりました。今では来場者数が5万人に達する（主催者発表）ほどの盛況ぶりです。本学科は、同イベントで中核的な役割を果たしています。

「身体と表現」

カンボジア王立ブノンペン芸術大学で古典舞踊を習得し、現在は国立劇場等で舞台を務めている、プロの舞踊家の先生による演習形式の授業です。授業では、カンボジア古典舞踊が有する歴史や精神文化を学んだ後に、実際に古典舞踊を学びます。基礎的な古典舞踊の動きを体得するだけでなく、舞踏を通して身体による表現の幅を広げることができます。

2019年12月

文化交流学科主任 岩間信之

目次

巻頭の辞（学科主任・岩間信之）

I 「日立風流物」体験プロジェクト

担当教員のことば

神峰神社大祭礼「日立風流物」を体験しよう！（清水博之）

学生体験レポート

II インドネシア日本語教育実習

担当教員のことば

「ゲスト」対「ホスト」、「教えてあげる側」対「教えてもらう側」の関係を
いかに崩していくか（中山健一）

学生体験レポート

III サンドアートボランティア

担当教員のことば

「ひたちサンドアートフェスティバル」（岩間信之）

学生体験レポート

IV カンボジア伝統舞踊に挑戦

担当教員のことば

身体と表現—カンボジア伝統舞踊に挑戦（山中仁美）

学生体験レポート

I 「日立風流物」体験プロジェクト



【担当教員のことば】

神峰神社大祭礼「日立風流物」を体験しよう！

清水 博之

日立風流物は、日立市宮田町に鎮座する神峰神社の祭礼に約 300 年前から氏子たちが奉納してきた民俗芸能である。その特徴は、高さ 15 メートル、重さ 5 トンにも及ぶ巨大な笠鉦に操り人形が配されて芝居が演じられることや、笠鉦自体にもさまざまなからくりが組み込まれていることである。民俗学的に最も着目すべき点は、これらのからくりや操り人形の制作や操作、工夫のすべてがプロに頼らずに素人の手によってなされていることである。操り人形を配した山・鉦・屋台行事は中部地方を中心に全国に伝えられているが、そのすべてを地元に住む人たちだけで完結させているところは多くない。

そして、日立風流物のもう一つの着目すべき点は、人形を配する表館（おもてやかた）に対比するように笠鉦の後ろ側に備えられた裏山（うしろやま）である。木綿布で設えられたこの岩山は、神の降臨する磐座（いわくら）そのものなのである。そしてその神を慰撫（いぶ）するために人間たちが操る人形芝居が表館で披露される。

日立風流物は、元禄 8（1695）年に水戸藩第二代藩主の徳川光圀（水戸黄門）が宮田村の鎮守であった神峰神社を南隣の助川村、会瀬村を併せて 3 つ村を統合した鎮守とするように命じたことが始まりだと伝えられている。神峰神社の祭礼は神峰神社山頂の本殿からご神体を太平洋に面した浜の宮へ移し、ふたたび山へ還ることが習わしであったものが、このことによって助川、会瀬の集落を巡行する形態に変わったのである。そのため、ご神体を乗せていた笠鉦は、宮田集落にとどまり、巡行が戻ってくるのを待つことになったと考えられている。やがて、この笠鉦に人形が配されて、祭礼の余興として人々を楽しませる民俗芸能へと変化していったのだろう。享保期（1716-1736）になると、飢饉のために旅芸人が宮田に村留めとなった折に、世話になった村人の恩義に報いるため、その旅芸人たちの芸事であった操り人形の作り方や操作方法を伝授されたという。この人形を笠鉦に配して祭礼のときに演じるようになり、ますます発展していったのである。その後、笠鉦には移動時には幅を狭めておき、人形芝居を演じる時にはその舞台を広げるために開閉式の仕掛けが組み込まれるようになる。幕末に向けては舞台も幾段にも増えていった。大正期になると人形の上下に首（かしら）をつけて、一斉に胴柄をひっくり返して役柄を変える早返り人形が登場して人気を博するようになる。特に弓矢をつがえて放つしかけは、今でも多くの拍手喝さいを得ている。

この日立風流物も第二次世界大戦末期には、本土空襲によってその部材や貴重な人形の首の多

くを焼失してしまい、存続は不可能だろうと言われていた。しかし、根本甲子夫（後に初の日立市名誉市民となる）やその仲間たちの努力により、見事に復元を果たし、昭和 34（1959）年には山・鉾・屋台としては全国で初の国指定重要民俗資料（法改正により現在の呼称は国指定重要有形民俗文化財）となった。昭和 52（1977）年には、これも全国初の国指定重要無形民俗文化財となり、国民の生活の推移を理解するために欠くことのできない民俗文化財として保護されるようになった。

平成 21（2009）年には、京都祇園祭の山鉾行事ともにやはり山・鉾・屋台行事としては初のユネスコ無形文化遺産になった（平成 28〔2016〕年に「山・鉾・屋台行事」として 33 件を一括して再登録）。

このように華やかな歴史を持つ日立風流物ではあるが、現在では後継者不足の危機に瀕している。その原因は、少子高齢化と人びとの価値観の変化である。旧宮田村の人たちだけで保存・継承されてきた日立風流物は、戦前の氏子組織といういわば地区内の関係性に重きをおいた制度の中で維持されてきたが、戦後の政教分離の風潮や自由な民主平等主義をもとにして発足した保護組織（保存会）は、従来のような各家から必ず 1 人は参加しなければならないというような責務を喪失させた。その結果、新人が加入するような更新性も失われてしまい、いつまでも世代交換ができずに会員の固定化と高齢化が進んだのである。

また、操り人形のからくりは、各家の秘伝として門外不出、一子相伝で伝えられてきた技術であったが、高度経済成長期の企業城下町であった日立市にあって、より効率的な運用をするために、操り人形の管理を支部単位でするところも現れるようになる。人形の各パーツをストックしておき、不具合があれば必要に応じてそこから、問題のあるパーツだけを持ち出し交換するというような形態を取るようになったのである。このことによって作者（操り人形を作り操作する役柄の人）の技術の継承と発展が停滞することになった。

しかし、このような山・鉾・屋台行事の高齢化や継承者の減少という課題は、日立風流物だけに限ったことではない。本来、都市で発達した山・鉾・屋台行事は、このような時代の変化に敏感に影響されるものなのである。そのような意味からは京都の祇園祭は、最も早い時期に同様の課題が起こったと言えるだろう。京都では、都市部の人口は変わらずとも、旧来の人たちだけで祇園祭を維持していくことが困難になっていた。そこで、祇園祭を支援するために大学で文化を学ぶ学生たちがその支援に乗り出すようになっていく。

たとえば、京都産業大学では、平成 25（2013）年から函谷鉾保存会の支援をはじめ、郭巨山（かっきよやま）保存会でも活動を進めている。これ以前にも学生と保存会のコラボレーションは単年度で実施されていたが、根本的な解決には至っていなかった。これを「函谷鉾検定」という試験をパスした学生だけが参加を許されるような仕組みを作った。

一方、佛教大学では、綾傘鉾保存会の活動を支援している。同大学歴史学部の八木通教授（民

俗学)が、同保存会の理事を務めていることもあり、有志の学生を募って祇園祭を手伝ってもらっていたことがきっかけとなり、平成13(2001)年から同大学で「祇園祭研修」という授業を始めることになった。ここで祇園祭を通して日本の伝統文化を学び、その現場実習として綾傘鉾保存会で粽作りから販売、笠の組み立てや巡行までを担うようになったのである。大学教育と文化財の保護・継承の現場が見事に融合した素晴らしい成果である。

興味深いのは、卒業した学生たちの多くは保存会の青年部に所属して、毎年、全国各地から祇園祭のときには仕事を休んで参集し、スタッフとして現在でも活動していることである。

このほかにも立命館大学は船鉾保存会、京都伝統工芸大学校は鈴鹿山維持会などへの支援が知られている。

日立風流物の公開にあたっては、これまで保存会以外の方が積極的に支援に携わったことはなかった。今回、保存会の皆様のご理解とご承諾を得て、初めて本学の学生50余名が保存会の会員とともに笠鉾を引き回し、操り人形や笠鉾の仕掛けの操作をさせていただくことができた。一部の支部では女人禁制の笠鉾の内部へ立ち入ることも許されたという。まさに画期的な出来事である。保存会会員の高齢化や後継者不足といった現状の課題に対する危機意識と、本学の地域貢献やひたち学にみられるような郷土文化への回帰の思いが一致した結果である。

すぐには、京都祇園祭のように日立風流物を支えるチカラには成り得ないかもしれないが、若い学生が日立風流物に参加することによって、保存会会員の沈滞した意識を変化させ、将来への希望を抱くことができるようになるのではないだろうか。そして、観覧する人たちにも、若者が伝統的な民俗文化財の公開に参加しているところを見せることは、町の活性化を促進することになるだろう。日立市に立地する本学が郷土文化の復興に果たすべき役割は大きいのである。



神峰神社大祭礼
本町の日立風流物を曳く学生ボランティア

「日立風流物」文化交流体験について

立原 彩椰（文化交流学科 2 年）

参加日：5 月 3 日（祝・金）

参加支部：北町支部

私にとって、今回の文化交流体験はいろいろな事を知り学べたのでとてもいい経験になったと思う。今回は祭りを見る側ではなく、祭りをする人たちを見る側だった。私の参加した北町の人たちは優しく接してくれたおかげで、この体験を楽しめたと思う。

私が驚いたのは日立風流物の迫力だった。5 トン以上もある笠鉦を引くのは力だけではなくその町のチームワークも必要だ。5 トンという大きなものを動かすぞという熱意が凄かった。私は今回初めて笠鉦を引っ張った。その中で、私はどのように引っ張るのかというコツのようなものが分かった。一つ一つの動作での連携が大切なのだなと思った。日立風流物の迫力があるのは保存会の人たちの熱意があるのだからなのだということを感じた。また、自分たちの笠鉦に誇りを持っているのだということも思った。ほかの町へのライバル心。それが日立風流物の迫力をますます高めているのだろう。

日立風流物がユネスコ無形文化遺産ということは知ってはいたが実感はなかった。日立風流物の説明が書かれている紙を配っていたら、東京から来たという観覧者から欲しいと言われた。日立風流物のことは地元の人しか知らないと思っていたので驚いた。日立風流物は地元でもユネスコ無形文化遺産と知っている人はいるが、知らない人も多い。まずは、多くの人たちに日立風流物は価値があるものと知ってもらいたいと思った。地元になんか誇れるものがあるということを知って欲しい。

今回の文化交流体験はとてもいい経験になった。参加して良かったと思う。

日立風流物に参加して

山田 維（文化交流学科 1 年）

参加日：5 月 3 日（祝・金）

参加支部：本町支部

私は、このボランティアの話聞くまでユネスコ無形文化遺産に登録されている行事が茨城県にあるということを知らなかった。茨城についてより深く知ることで将来の役に立つと思って参加しようと思った。

参加してみて、地元の人々の強い結びつきで存続されていることを実感した。皆さん仲良く話していて自分たちがその中に入っているのが不安になるほど強い結びつきだった。その結びつきの強さが日立風流物をユネスコ無形文化遺産へと導いていったのだと分かった。また、多くの市議会委員や国会議員の方々がいらっしゃっていて、茨城にとって本当に大きな行事なのだということを知ることができた。

私は、これからの日立風流物に必要なのは広報力を上げることだと思う。実際私は今回の話があるまで茨城県の日立市に日立風流物というユネスコ無形文化遺産に登録されている行事があることを知らなかったからだ。また、高校時代の友達も知っている人はいなかった。後継者を集めるためにも、地元の人々にもっとアピールしていくべきだと思う。

今回、外部から初めてボランティアを募集するという事で、とても貴重な体験ができた。七年に一回という数少ない行事に参加できてよかった。この経験を人生の糧の一つとして、将来に役立てようと思う。今回は本当にありがとうございました。



北町の日立風流物を見る学生ボランティア



日立風流物（本町支部）



日立風流物の鳴物ぶっつけ（奥から東町、北町、本町、西町）令和元年5月3日

Ⅱ インドネシア日本語教育実習



【担当教員のことば】

“ゲスト”対“ホスト”、“教えてあげる側”対“教えてもらう側”の関係を いかに崩していくか

中山 健一

文学部「日本語教員」資格科目（主専攻）の必修科目「日本語教育実習 A」では主に、県内の日本語学校や日本語ボランティア教室で行なわれる国内日本語教育実習と、インドネシアのリアウ大学で行なわれるインドネシア日本語教育実習の2つが用意されている。本報告は、そのうちの後者の実施報告である。

冒頭から少し脱線させていただきたい。本年度のインドネシア日本語教育実習が無事終って1か月ほど経った2019年10月16日、本学シオン館大会議室にて、リアウ大学教育学部と茨城キリスト教大学文学部との学部間協定の調印式が行なわれた。これは、従来結ばれている大学間協定に加えて、それを補い強化する目的で新たに結ばれる協定である。リアウ大学からは副学長、教育学部長、教育学部日本語教育学科の先生方をお迎えし、本学からは東海林学長、池内副学長、上野文学部長、山中地域・国際交流センター長（司会進行）、文化交流学科教員（堀口先生、宮崎先生、中山）および関係職員・交換留学生が出席した。調印式は和やかな雰囲気のもと進められ、調印式後のやりとりでは双方の大学担当者から今後も学生どうしの交流を継続して積極的に進めていきたいという意見が出された。

本学からリアウ大学への学生派遣プログラムの柱であるインドネシア日本語教育実習も今回で3回目を迎えた。今回から、参加実習生への事前指導と、受け入れ先の先生との事前打ち合わせを今まで以上に綿密に行なったうえで、引率教員なしで実施した。今回「引率教員なし」の実習が大きなトラブルなく成功裏に終わったことに喜びと安堵を感じると同時に、受け入れ先の先生方に改めて感謝申し上げたいと思う。

冒頭の調印式でのやりとりにあるような、継続した学生の派遣を実現させるには、どうしても「引率教員なし」にせざるを得ない。教員と予算の確保の面から「引率教員あり」では毎年継続することが極めて困難だからだ。したがって、今回の成功によって、今度毎年継続して実習生を送り込める体制ができ、今後リアウ大学と本学との学生の交流をより活発にしていく基盤ができたと言える。

そしてこのことは、単に実施の頻度が増えるだけでなく、この実習の性質自体に変容をもたらすだろう。それがこの文章の副題とした、「ゲスト」対「ホスト」、「教えてあげる側」対「教えてもらう側」の関係をいかに崩していくかである。

相手の大学を訪問し、相手に自分の母語を教える場合、どうしても「ゲスト」対「ホスト」、「教えてあげる側」対「教えてもらう側」の関係になりやすい。この授業が文化交流を第一の目的と

した授業ではなく、教育実習であることがそれをさらに強化してしまう。むしろ教育実習なのだから、教師の卵である実習生には、教師の役割をきちんと果たしてもらわないと困るし、教える技術を身につけてもらう必要がある。しかしその一方で、リアウ大学の学生とは同年代の友人として、対等な関係でお互いの言語・文化を理解しあい、人間関係を構築してもらいたいと強く思う。おそらく今後、毎年同じ時期に訪問することによって、本学の学生にとってリアウ大学に行くことが当たり前のこと、そして、リアウ大学の学生にとって本学学生を迎えることが当たり前のことになっていくだろう（実はこういった授業はきわめて少ない。藤田先生・鈴木先生のご担当で2018年度まで実施されていたカンボジアでの「海外ボランティア」くらいではないだろうか）。そういった継続的な交流を積み重ねていけば、“ゲスト”対“ホスト”、“教えてあげる側”対“教えてもらう側”の関係を越えて、より対等な関係が築いていけるのではと期待している。

もちろんそれには、担当教員も事前指導の内容を変える必要がある。今回を含めて、これまではどうしても「教えること」の指導が中心で、「相手の言語・文化を理解したうえで対等な関係を構築していくこと」をめざした指導が十分できていなかった。来年以降はこの点も重視して事前指導をしたい。

ただ、個人的には楽観的に見ている。実際、これまでの参加実習生も自分なりにそうしていたし、授業担当者が言わなくても本学の学生たちならちょっときっかけを与えるだけでできそうな気がするのだ。今回も授業担当者が直接言わなくても、参加実習生たちはインドネシアのことを積極的に知ろうとしていた。また一部の学生は、日本文化紹介の発表で使用するパワーポイントにインドネシア語の説明をつけたりしていた。はたしてインドネシア語があっただろうかまではわからないが…。

前置きが長くなってしまった。以下に今回の概要をまとめる。なお「日本語教育実習 A」の概要や目指すものについては、本報告の2017年度版に記したので、そちらをご覧ください。

2019年度 インドネシア日本語教育実習の概要

【実習先】

リアウ大学 教育学部日本語教育学科（インドネシア リアウ州 プカンバル市）

※このほか、県内の4つの日本語学校・日本語ボランティア教室にて国内日本語教育実習が行なわれた。

【参加者】

2019年度「日本語教育実習 A」履修者8人のうち、以下の6人がインドネシアでの実習に参加した。6人はインドネシアでの実習と国内での実習の両方を行ない、不参加の2人は国内での実習のみ行なった。実習総時間数は履修者8人とも同じである。

角川 雅子（文化交流学科3年）

片根 菜月（文化交流学科3年）

佐藤亜優美（文化交流学科3年）

高藤 千晶（文化交流学科3年）

箕輪 栞（現代英語学科3年）

村上 晴香（現代英語学科3年）

【日程】

①事前研修 ※毎週の「日本語教育実習 A」の授業をのぞく

第1回 6月18日(火)

参加者 中山・堀口(文化交流学科教員)、塚田さん(日本旅行水戸支店)、
参加実習生

第2回 8月8日(木)

参加者 中山・堀口(文化交流学科教員)、塚田さん(日本旅行水戸支店)、
ディニ先生(リアウ大学、SKYPEにて)、参加実習生

第3回 8月26日(月)

参加者 中山(文化交流学科教員)、塚田さん(日本旅行水戸支店)、参加実習生

②日程表

8月31日(土) 夕方、羽田空港集合

ジャカルタへ向けて出発(飛行機内にて1泊)

9月1日(日) ジャカルタを經由しリアウ大学のあるリアウ州プカンバルに到着

リアウ大学の先生方と合流

ホテル「Zuri Express Pekanbaru」チェックイン

9月2日(月) リアウ大学到着

日本語教育実習 開会セレモニー

実習の説明

授業担当教員と実習生との個別打ち合わせ

9月3日(火) 授業見学

ミーティング

9月4日(水) 本学実習生による日本文化紹介

リアウ大学の学生によるインドネシア文化紹介

ミーティング

9月5日(木) 授業補助(授業担当の先生のアシスタントをする)

ミーティング

9月6日(金) 授業補助(授業担当の先生のアシスタントをする)

ミーティング

実習授業実施(9月9日)の準備・練習

9月7日(土) リアウ観光(自然保護区域、モスク、市場など)

9月8日(日) 自由時間

必要に応じて各自、実習授業実施(9月9日)の準備・練習

9月9日(月) 実習授業実施

ふりかえり指導

リアウ大学主催 夕食会

- 9月10日(火) ホテル「Zuri Express Pekanbaru」チェックアウト
ジャカルタを經由し世界遺産のあるジョグジャカルタに到着
現地ガイドと合流
ホテル「Favehotel Malioboro Yogyakarta」チェックイン
- 9月11日(水) 世界遺産ボロブドゥール遺跡見学、ショッピングなど
- 9月12日(木) ホテル「Favehotel Malioboro Yogyakarta」チェックアウト
世界遺産プランバナン遺跡見学など
ジャカルタを經由し羽田空港へ向けて出発(飛行機内にて1泊)
- 9月13日(金) 早朝、羽田空港に到着
解散

③地図(出典: Google Map)





おわりに

冒頭記したとおり、今後毎年インドネシア日本語教育実習を続けたいと考えている。本報告を読んで少しでも興味が湧いた日本語教育実習主専攻の学生は、ぜひ来年以降、参加を考えてほしい。詳細は参加実習生のレポートを読んでもらえればわかるが、国内での日本語教育実習とも、また、海外で実施される他の授業とも違う体験ができるはずである。



プカンバルでの 10 日間

文化交流学科 3 年

片根 菜月

東南アジアに行くのはこれで二回目だが、とても雰囲気似ていた。バイクがたくさん走り、学生の通学もほとんどがバイク移動であった。中心街の街並みは想像していたよりも大きな建物があり、モールや図書館、警察など、また様々なモスクを見ることができた。どれも迫力のあるものだった。

食事面では聞いていた通り辛い食べ物、甘い飲み物だった。なるべく辛い食べ物を選んでいたが、それでも日本の辛さとは比にならなかった。涙が出るほどの料理を食べたこともあった。しかし、ナシゴレン、ミーゴレンなどインドネシアの料理はとても美味しかった。チキンはほとんど毎日食べていた。私は日本で食べられない料理を食べようと決めていたので挑戦をいろいろできたことは、とてもよかった。また、インドネシアは手を使って食事をするのが一般的である。最初私は戸惑ったが、箸やフォークがないご飯がたびたびあるうちに、手を使った食事に違和感がなくなっていった。日本人だけでご飯を食べているときも手を使っていたのだが、「今日のご飯はまとまらないね」と言って話していた時、手を使った食事に完全に慣れていたことに気づかされた。

リアウ大学へ通う間はホテルに滞在した。色々小さなトラブルはあったものの、ホテルマンの方も優しく、安全に過ごすことができた。また、ホテルの朝早くからコーランが大音量で鳴り響くのも数日で当たり前になっていた。

日本との生活は全く異なっていたが、慣れてしまえば何事も普通になっていくことを実感できた。インドネシアの文化を知り体験できたことは私にとって非常にいい経験だった。機会があれば是非また行きたい。

リアウ大学と学生の様子について

文化交流学科 3 年

角川 雅子

リアウ大学の敷地はとても広く、キャンパス内には教室、学生が空き時間に遊ぶ公園やグラウンドがたくさんあり、案内してくれた学生が地図を見て現在地を教えようとしても見つけれないほどでした。また、キャンパスがとても広いので教室の移動は基本的にバイクで移動しているようで、私たちが移動する時にはリアウ大の学生と一緒にいかないと迷子になってしまいそうでした。

リアウ大学には日本の大学にあるサークルはないようでしたが日本語学科には「悟り」という日本文化研究会のような組織があり、私たちと積極的に交流した学生の大半が所属していました。みんな日本語が上手だったので、コミュニケーションに困ることもなくインドネシア語の通訳してもらったり、日本のことやインドネシアのことを教えあったりと楽しい時間を過ごすことができました。最初は互いに緊張していましたが仲良くなるととても距離が近くなり、放課後はもちろんのこと休日と一緒に遊ぶことができました。

リアウ大学での時間はとても短く感じましたが、学生と過ごした時間はインドネシアでの一番の思い出になりました。

Ⅲ サンドアートボランティア



【担当教員のことば】

「ひたちサンドアートフェスティバル」

岩間 信之

2019年7月14日（日）に、ひたちサンドアートフェスティバル2019（以下、サンドアート）が開催されました。サンドアートとは、地元である河原子海岸で開催される、夏の海の祭りです。砂浜に大型砂像を多数作成するほか、各種スポーツイベントや音楽イベントを盛り込み、海開きの河原子海岸をにぎやかに彩ります。祭りの締めは、曲に合わせて一斉に花火を打ち上げる、15分間の劇場型花火です。

サンドアートを開催する意義は、日立市内で暮らしながらも普段は接する機会が少ない多様な人々が、一つの目標に向かって汗を流しあい、「地域の縁(紐帯)」を紡ぐことにあります。サンドアートの実行委員会は、日立青年会議を中心とした地域の若手たちです。本学教員も実行委員会に加わっています。また、本学の学生ボランティアは、イベントスタッフの主力として、長年にわたりサンドアートを支えています。こうしたイベントを持続的に開催することで、本学の学生（および教職員）と地域の方々との間に、少しずつですが絆が生まれてきたと実感します。

今年は、本学のボランティア学生92名（+飛び入り参加者数名）、および本学の教員2名が、スタッフとして参加しました。また、卒業生たちもスタッフとして参加してくれました。午前中はあいにくの雨模様で、来場者がほとんどいない状況でした。しかし昼すぎに雨が上がると来場者が増え始め、夕方までには例年通りの大人数で会場が埋め尽くされました。なお、イベントの締めを飾る20時からの劇場型花火が成功裡に終わったとたん、また雨が降り始めました。間一髪でした。結果的に、今年も約5万人（主催者発表）の方々が来場するなど、イベントは大盛り上がりでした。

ひたちサンドアートフェスティバルは、今年で9回目となる息の長いイベントです。しかし、持続性の面で課題が残っています。同イベントは、行政からの補助金をほとんど受けていません。サンドアートは、地域の方々からの協賛金と、ボランティアで働くスタッフたちの熱い想いの上に成り立っています。開催費用の確保は、毎年大きな課題となっています。実は昨年、サンドアートは資金不足とスタッフ不足のために中止となりました。年々増加する負担を鑑み、このままサンドアートを取りやめようという意見が、実行委員会の中では過半を占めていました。しかし、地域の方々からのイベント再開の熱い希望が多数寄せられたため、2019年にサンドアートフェスティバルを再開する運びとなりました。

1年間のブランクがあるため、今年では来場者が減少すると予想されました。また、資金不足を

補うために、今年度は一般来場者の方々に協賛金として絆リング（前売り 1,500 円, 当日 2,000 円。子ども無料）の購入をお願いせざるを得ない状況でした。このことも、人々の足を遠のかせる一因になり得ます。さらに、このイベントは本学の学生ボランティアに支えられています。学生たちは、主に先輩たちからの口コミで集まってきてくれています。blankができたことで口コミが途絶え、ボランティアが集まらなくなることも十分予考えられました。しかし、結果的にはすべてが円滑に進みました。心から感謝です。これからもサンドアートが継続し、「地域の縁（紐帯）」が広がっていくことを、強く願っています。



サンドアートフェスティバル会場外観

サンドアートフェスティバル感想

文化交流学科 4 年

打越美帆

今年で3回目のサンドアートのボランティア。去年は開催しなかったため、今年サンドアートを楽しみにしていた。しかし、楽しみな気持ちとは裏腹に、雨で始まったサンドアート。午前中は雨が降り続き、気温も低く、今回のサンドアートはどうなるのかと思っていた。

1.2年生の時はアトラクション係を担当していたが、今年は本部を担当した。そこでは、協賛金を頂いた方、団体の確認などをメインに行った。協賛金は一団体5万円だそう。それを今回本部にかかわったことで3年目にして初めて知った。このように協力してくださる団体が約100団体あること、その方たちのおかげでこのイベントを開催することができていることを身にしみて感じた。これを知ったことで、私はこのイベントをサービス精神でより良いものにしたいと強く思った。

午後からはサンシャイン池崎のおかげか、心配していた天候も回復し、どうなることかと思っていた来場者も例年と同じくらい集まってきて、賑わり安心した。

毎年恒例の最後の花火は圧巻だ。花火が上から降り注いできて、土浦の花火よりも感動する。また、疲れ切った体力・気力を一気に回復してくれる魔法のような花火だ。

このボランティアは、朝から夜まで体力を消耗し、とても大変である。しかし、それに比例して達成感も大変なものである。帰り道では、毎年友達と、サンドアートの魅力等を話しながら帰る。私はもうこのボランティアの虜になっている。学生最後の年に素晴らしい夏の幕開けだ。

サンドアートボランティア

文化交流学科 3 年

渡辺双葉

子供からお年寄りまで地域の人たちとたくさん交流できる貴重な機会でした。進んで行動することで普段関わることのない多くの人と笑顔で心地よい時間を共有することができました。さらに、人の役にたった充実感を得ることができ、有意義な時間を過ごせたと思います。同時に、普段の自分はあまり人と関わっていないと感じました。特に子供と関わることは滅多にないので新鮮でした。

私自身、高校時代ボランティア部に所属しており、当時から感じていたことですが、一度ボランティアに参加することでボランティアに対する認識は大きく変わると感じました。

青年会議所の方のご厚意でサンシャイン池崎のボディーガード役に任命され、一番前で警備しつつ、お笑いを見ることが出来ました。さらに、握手までしてもらうことができ、とても良い思い出です。

今回ボランティアに参加したことで、一人ではできないことも多くの人が集まることで可能になることを実感しました。一人一人の小さな活動が、より多くの人に広まっていくことで地域の活性化に繋がると思いました。ボランティア関係なしに楽しむことができたので、是非来年も開催する場合は参加したいです。ボランティア活動に出来る限り参加していこうと前向きな気持ちになれました。



砂像の一例

IV カンボジア伝統舞踊に挑戦



【担当教員のことば】

身体と表現—カンボジア伝統舞踊に挑戦

山中 仁美

この報告書では、以下、1、「身体と表現」講義の実施内容、2、カンボジア伝統舞踊の概要、3、講義におけるアクティヴ・ラーニングの実施、について書いていきたい。

1、「身体と表現」講義の実施内容、

まず初回で、5分のカンボジア古典舞踊の基本練習曲（演目A）を私が学生に踊って見せた。当初は、基礎であるその演目を1,2分でも良いのでできるところまで教え、更に達成感を得てもらう為、もう少し簡単な古典舞踊の演目（演目B）を最後まで教える、という二本立てで授業計画を立てていた。

しかし2回目で、既に学生が半分ぐらいに減ってしまっていた。どうもカンボジア古典舞踊は、何かしら芸術的な雰囲気を感じてはもらえるようだが、「頑張って習得したい」と多くの人に思わせるものではないらしい。

そこで予定を変更し、カンボジア人の誰もが踊れる民衆舞踊（日本の盆踊りのようなもの。演目C）を教え、それらを4曲教えたところで、簡単な古典舞踊（演目B'）を教える、というようにした。またB'の演目も2曲学生達の前で踊り、どちらをやりたいか希望をきき、その演目を教える事にした。

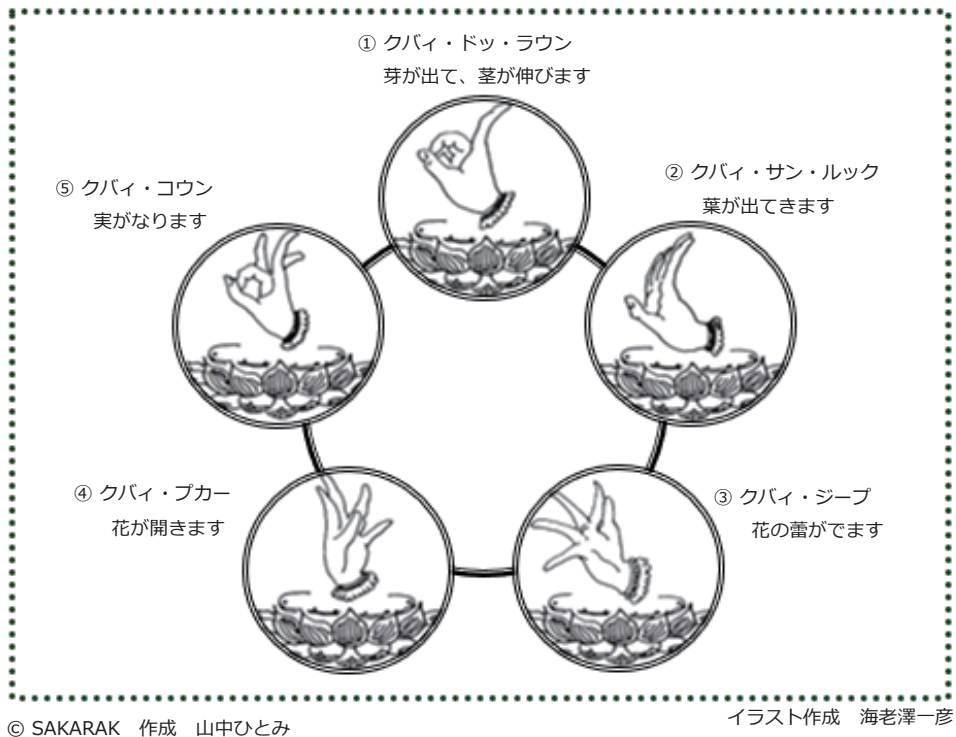
そして、一通り教え終わった12回目で学生主催の発表会を行い、13回目に振り返りミーティングを行い、14回目でその結果をレポートにまとめて提出してもらい、最終回で私からの助言を伝え最終稿としてのレポート提出、という形で授業を終えた。

2、カンボジア伝統舞踊の概要、

カンボジア伝統舞踊は、一言でいうと「アンコールワットに伝えられる踊り」と言える。まず、豊作を祈願したり、収穫を祝ったりするための民衆・民俗舞踊が生まれた。（演目C）そしてそれは、自然や祖先を敬うアニミズムと、ヒンドゥー教や仏教が一緒になったカンボジア独自の宇宙観を表現するために、10世紀以降、宮廷で古典として洗練された。（演目B、B'）また、2003年にカンボジア古典舞踊の精神性と芸術性は高く評価され、ユネスコの世界無形文化遺産に登録された。

その特徴は、屈曲した手足とアイソメトリックな力の使い方（作用と反作用のように常に拮抗する力が働く）、身体を中心から末端を制御する身体の使い方、身体の外と内に意識を向けながら踊る為「瞑想する身体」を思わせる。

因みに、「瞑想する身体」を思わせる舞踊は、東南アジア舞踊全体、或いは、全ての身体表現にそういう精神的な側面があるともいえる。しかし、カンボジア舞踊はとりわけダイナミックとい



うよりはスタティック、しかも連綿と動きが続いてやまない様子が特徴であり、深い呼吸のように踊っている者・観ている者にある種の高揚感をもたらす。

身体の動きはそれぞれ意味を持ち、4千以上ともいわれる型がある。特に、花が開いては閉じるような指先は、初めて観る人にも意味が分かりやすく、植物の命の連鎖や宇宙の循環を表現している。

3、講義におけるアクティヴ・ラーニングの実施

アクティヴ・ラーニングとは、「学生自らによる能動的授業を目指す授業。体験学習・調査学習・グループ討論・ディベート等」（出典：デジタル大辞泉・小学館）とされる。本講義も、舞踊体験・発表会主催を通して、「学生が自らの希望を軸に、自らの力で一つの企画を実現する事」を目標とした。

その成果は個々の学生のレポートに委ねるが、ここでは、私の立場から幾つか感想を述べたい。まず、私が一番驚いたのは、「発表会で踊りたくない。かわりに、演目B'を動画で撮影し、その動画を発表会で上映したい」という、学生達からの意見だった。

私は、「この講義をとった時点で、学生たちは少なくとも踊りは嫌ではないはず。そして、踊れるようになったら、自分の踊りを他人に見てもらいたいもの」と、勝手に思い込んでいたからである。そして、アナログな時代を生きてきた私にとって「踊る」とは、その刹那にしか存在しな

い臨場感が命であるという事に、何ら疑いはなかったからでもある。

しかも、IT リテラシーに長けているだけでなく、win-win の社会性も併せ持つ心優しい学生達は、「その動画があれば、先生も来年の受講者を集める時に役立ちますよね？ Facebook にもアップでき、宣伝もできますよね？」と、事後の効果まで計算してくれているのである。何と、素晴らしい！しかし、礼拝堂を快く使わせて下さるチャプレンやスタッフ、お集まり頂く学生・教職員の方々の反応を想像する時、やはり受講者本人がいるのに本人が踊らない動画上映には、私は抵抗があった。私にとって、踊りはやはり瞬間表現であったので、そこは私の主張を通させてもらおうべく努力した。

結局、撮影・上映等の IT 技術については学生達自身もあまり得意分野ではないらしく、私の説得に応じてもらえる一因となった。そして、「なぜ、自分が学内の人前で踊ることは嫌なのに、世界の果てまで届く Facebook にアップする事には抵抗がないのか」、学生達も私にわかるように説明してはくれなかったが、結局、次の形で発表会を行う事で合意ができた。即ち、「古典舞踊は、受講学生ではなく講師が踊る。受講学生は、演目 C のごく簡単な民衆舞踊を踊る。その代わり、学生達は舞踊の歴史等について口頭で発表をし、発表会自体を運営する」という体裁である。

そして学びの結果は、学生達のレポートの通りである。

学生達は、「自分達が主体となって何かをした経験がなく」「私たちが中心となって本番までの準備を全てするということが初めてだったため不安だった」ようである。しかし、「準備を進めていく上で（ママ）、『成功させたい』という気持ちが強くなった」そして、「観に来て頂いた先生方が喜んでいらっしゃるのを見て、決して完璧でなくてもこのように喜んで頂けるのだと分かり」「やって良かったと実感した」そして、「積極的に行動する事は少なくとも、周囲の様子をみながら意見を聞くことができ、そこが自分の長所だと知ることができた」と感じた学生もいた。更には、「告知面での改善が必要」と、今後の改善点についても考えた。将来はバレエ教室の教師希望の学生も、「自分がどのような事に目を向け、どのような行動を取るべきなのかが少し見えてきた」と、結んでいる。...、とはいえ、その話をした時、彼女の顔がうかなかったのは何故だろう？と私は考え、実は思い至る事がある。それは結局、どの学生も私と同じなのかな、という事だ。初めて挑戦することは不安、何をしたら良いのかわからず、失敗が怖い。学生達も、色々な具体策を私から助言されても、何故か怖い、億劫。自信がない。それなりに豊かな社会に生きる人間の悩みは、その一言に尽きるのかもしれない。

ただ、「自分が得られる自信は、自分が主体的に動く事からしか得られない」と、彼らより幾分長く生きてきた私は思う。そして、主体的に動く為には、人は本当に多くの困難や怖れと闘い、挫折と折り合いを付けてゆかなくてはならない。しかも人間は、本当に好きな事、楽しい事しか頑張れない。だからこそ、そこを探すのが人生を生き抜く力になると、私は思う。

「何をしている時に、あなたは自分を好きで、自分の人生に意味があると思いますか？一緒に最後まで探し続け、自分の人生を愛していこう」本講義を通じて、そんなメッセージが僅かでも学生達に伝えられたとしたならば、それが私の本望である。

カンボジア古典舞踊から学んだこと

文化交流学科 2年 吉川亞民

先日、キアラ館にてカンボジアについての発表を行った。この発表が行われるまでの間、たくさんの意見があった。

まずこの発表で、私たちはカンボジア舞踊の紹介の際に古典舞踊を披露するのだろうか。その理由は、「まだカンボジア舞踊の踊りを完璧に踊れていない」という自信のなさや、恥ずかしさ、色々な感情から踊ることへの抵抗があったからである。

また、限られた時間の中でカンボジアについて知ってもらうために何を発表するのか。講師の山中先生と相談しながら準備をし、話し合いを重ねた結果、カンボジアの紹介を3人で発表をして、その次に山中先生に古典舞踊を踊っていただいて最後に先生を含め4人で「サラワン」という簡単な踊りをすることにした。

会場の準備や、どのタイミングで音楽を再生するかなど、私たちが中心となって本番までの準備を全てするということが初めてだったため不安だったが、準備を進めていく上で、「成功させたい」という気持ちが強くなった。

本番当日、とても緊張したが先生が用意してくださった綺麗なカンボジアの衣装を着て、緊張がそこでほぐれた。発表している最中は、夢中で気がつくことができなかったが、終わった際に、観に来ていただいた先生方が喜んでいらっしゃるのを見て、決して完璧でなくてもこのように喜んでいただけるのだと分かり、短い時間ではあったがやってよかったと実感した。そしてキアラ館で学生が発表を行うことはあまりないと思うので、私たちにとってはとても良い機会になった。

私は、自ら「こうしよう！」って意見を言ったり行動したりすることはあまりせず、まわり

の人に言われてから行動することが多い性格である。しかし、「身体と表現」の授業では、何を発表したいのか一緒に踊った仲間の意見を聞いてまとめたり、仕事の役割も分担したりし、さらに自分でも何かできることを見つけたりした。そしてそれは、他人の事を考え、みんなのためになるようにしているのものであるということが分かった。

以上のことから、積極的に行動することは少なくとも、周囲の様子をみながら意見を聞くことができ、そこが自分の長所だと知ることができた。これからの社会生活の中で、自分の長所をみつけ、その良いところを活かしていきたい。



カンボジア舞踊の発表を終えて

文化交流学科 2年 山本真央

私たちは、「身体と表現」という授業で、カンボジア舞踊と歴史についての発表会をした。一ヶ月前に発表すると決まってから、舞台を作り上げるまでに自分たちがしたことは、演目決め、踊りの配置決め、司会進行係決め、発表の原稿作り、発表会のタイトル決め、プログラムに載せる告知の文章と写真決め、CD編集、会場を貸して頂くチャペルの先生方への挨拶・打ち合わせ、会場の下見・設備決め、衣装決め、当日のスケジュール決め、当日の集合時間や準

備時間の調整などである。

このような経験を通して、自分たちで一からアポイントメントやコンタクトをとり、一つの発表会を作り上げることの大変さや責任感を知った。

今まではこのような機会で、自分は舞台上踊るだけしかなかった。しかし今回初めて舞台を作り上げる為の裏方の仕事をしたことで、大変さだけでなく、自分たちがいつまでに、どのような行動を取るべきなのかを体験して知ることができた。とても貴重な経験をさせてもらったと思った。

私はクラシックバレエを、七歳の頃から現在まで習っている。現在はアシスタントとしての立場で、子供クラスの先生を担当しながら自分も生徒として踊っている。将来は、バレエの先生になりたいと考えている。

現在私は先生のお元で小さなバレエ教室を立ち上げようとしているところである。だが、自分はどのような行動をとるべきなのかわからず、その話から逃げてしまっていた。でも今回このような経験をさせていただいたことで、自分がどのようなことに目を向け、どのような行動を取るべきなのかが少し見えてきた。例えば、教室を立ち上げるには、レッスン場を探してその場所を貸してくださる方と連絡を取ったり、近くの地域住人に告知をして生徒を集めたりすることが必要だということを学んだ。

教室を一から立ち上げるのは容易なことではないと思うし、これから思うようにいかないこともたくさんあると思う。しかし、今回先生に支えられながら仲間と一緒にこのような課題に取り組んだ経験を活かして、これからも自分から進んで積極的に行動できるようにしていきたい。

カンボジア舞踊を通して感じたこと

文化交流学科 2年 横田合香

7月4日木曜日のお昼に、キアラ館にて授業“身体と表現”の講師である山中ひとみ先生と、受講生3人でカンボジア舞踊の発表を行った。授業を通して良かった点や大変だった点、また、今後の改善点などを紹介していこうと思う。

まず、良かった点は授業と発表を通してそれぞれひとつずつある。授業を通して良かった点は、カンボジア舞踊だけでなくカンボジアの言語であるクメール語や歴史など、カンボジアについて一緒に学べたということだ。授業中も、受講生や先生とクメール語を交えて会話をし、舞踊だけでなくカンボジアという国について興味を持つことが出来た。

発表を通して良かった点は、ひとつのことをやり通した時に得られる達成感を感じられたことである。これは次の大変だった点でも紹介するが、自分たちが主体となって何かをした経験が無かった為、難しい点が多かった。しかし、先生からも“こうした方がいいんじゃない?”などとアドバイスを頂きながら受講生みんな協力し合い、無事に発表を終えることが出来た。そして、たくさんの先生方にもお褒めの言葉を頂けたことがとても嬉しく、同時に大きな達成感も感じる事が出来た。

次に、大変だった点について紹介する。こちらも、授業と発表を通してそれぞれひとつずつある。授業を通して大変だった点は、舞踊そのものが難しかった。体の動かし方や姿勢、指先まで意識することの難しさや、視線移動の仕方など、初めて挑戦することばかりだった為、習得するまでに時間を要した。しかし、上達すると先生が褒めて下さるので、それがとても嬉しかった。

次に大変だった点は、発表を通して感じた責

任感である。先ほども述べたように、自分たちが主体となり何かをすることが初めてだったので、今まで感じたことがなかった責任感を強く感じ、同時に不安もあった。しかし、これから社会人になるにあたって、自分が率先して何かを成し遂げる力というものはとても大切なことだと思う。大学生のうちにこの経験をした事はとても強みになると思うので、難しい点もあったが、挑戦してみても本当に良かった。

今後の改善点については、発表などをもっと多くの方に見て頂く為に、告知をしっかりと出来たら良いと思う。このような発表や授業は、多くの方がカンボジアについて知ることで出来る良い機会だと思うので、もっと多くの方に見て頂きたい。その為に、皆が見える場所に案内を掲示することや、ビラを配るなど告知面での改善が必要であると思う。



チャペルにて発表会



スピーチの様子



模範となる先生のポーズ

2019 年度 文化交流学科
アクティブ・ラーニング実施報告書

発行日 2020 年 2 月 15 日
編集発行 茨城キリスト教大学文学部文化交流学科
〒 319-1295 茨城県日立市大みか町 6-11-1
電話 0294-52-3215 (代表)

©2019, Department of Cross-Cultural Studies,
College of Literature, Ibaraki Christian University